

【海外学会報告】

国際フランコフォニー学会 第37回世界大会参加報告
Conseil International d'Études Francophones (CIÉF)
37^e congrès mondial, 19-25 juin, Hammamet, Tunisie

2023年6月19日(月)から同25日(日)まで、チュニジアのハマメットで国際フランコフォニー学会(CIÉF)第37回世界大会が開催された。全体のテーマとして「*Représentations et imaginaires de l'espace francophone*」が掲げられ、例年よりやや小規模ながら40あまりのセッションに分かれて150ほどの研究発表があった。そのほかチュニジアの作家たちによる討論会や、マグレブ諸国でフランス語教育にたずさわる専門家たちによる言語とアイデンティティの問題に関する討論会、そして水曜午後にはカルタゴの遺跡見物などもあり、コロナ禍以来久しぶりに各国からの参加者と関心を共有できる貴重な時間を過ごした。

ハマメットはチュニス・カルタゴ空港から東南に約60km、車で約1時間のところに位置する古くからのリゾート地である。フランスの保護領だった時代にヨーロッパ人によって開発され、作家のアンドレ・ジッドやジャン・コクトー、画家のパウル・クレーなども愛したという。会場があったヤスミン地区は高級ホテルが立ち並ぶ界隈で、目の前には真っ青な地中海が広がる典型的なリゾート地。旧市街からは十数km離れていたが、学会も宿泊も食事(郷土料理のビュッフェ)も1つの場所で完結するので便利だった。会議室の内装は豪華そのもので、コロナ対策も入念に行われているようだったが、アザーンが聞こえてこない隔絶した環境で、一般庶民の暮らしがあまり見られなかったことが残念だった。以下、大会の研究発表を簡単に振り返りたい。

まず、初日に、小倉和子(立教大学)が参加したセッション「*Poétique identitaire dans les écrits antillais et autochtones*」が行われた。このセッションでは、韓国ケベック学会初代会長のHAN Daekyun(University of Cheongju)がマルティニク出身の作家 Paulette Nardal に光をあてる発表を行った。ネグリ

チュード運動において重要な人物であったにもかかわらず、女性という理由で注目されることの少なかった人である。また、CIÉFの常連であるJIN Jonghwa (Kongju National University) は、2人のカリブ海作家、すなわちハイチのJean Price-MarsとマルティニクのAimé Césaireのなかにアフリカ起源を探る考察を行った。そして小倉は「Naomi Fontaine et la littérature autochtone au Québec : pays, paysages et mémoires」と題する発表を行った。昨今のケベックにおける先住民文学への関心の高まり、保留地が抱える諸問題、先住民が彼らの過去・現在・未来をどのようにとらえようとしているかなどについて、ナオミ・フォンテーヌのテキストの分析を通して論じるとともに、日本のアイヌ民族が強いられてきた言語・文化・生物学的同化についても言及し、先住民どうしの対話と交流の促進の重要性を説いた。

また、21日(水)には、ケベックおよびフランス系カナダの文学に関するセッションで、韓国ケベック学会副会長のSHIN Junga (Hankuk University of Foreign Studies) が「La Nouvelle-France revisitée à travers *Les Aventures de Perrine et de Charlot de Marie-Claire Daveluy*」と題する発表を行い、20世紀初頭にナショナリズムとカトリックの教義を教えるために書かれたこの青少年向けの小説を通して当時のケベック社会をあぶりだした。出版当時(1923年)はほとんど注目されることのなかった作品だが、女性の役割が再評価されるなかで関心と呼ぶようになったとのことである。

このほかにも、ケベック関連ではGabrielle Roy, Dany Laferrière, Kim Thúy, Christian Gay-Poliquin, Virginia Pésémapéo Bordeleauなどの作品が取り上げられ、また、モンレアルという都市空間の文学的表象や、ケベック文学と世界横断に関する膨大な数量的調査の結果を披露する発表まであった。もちろん、国際フランコフォニー学会なので、ケベック以外のフランス系カナダ、マダレブ諸国、マダガスカル、カリブ海、フランスなど、取り上げられた地域は広く、文学以外に映画や言語教育などをテーマとした発表も多かった。

今回の大会では、日本からの参加は小倉だけだった。コロナ禍で海外旅行からすっかり足が遠のいていたが、久しぶりに韓国ケベック学会の仲間と北アフリカの地で再会し、食事の時間などを共にすることができた。学会参加は専門的知識の共有以外の部分も重要であることを改めて感じさせられた。学期中の海外出張で、期間も限られていたため(そのうえ、日中は外の気温が40℃近くまで上がるため)、大会会場以外で訪れることができたのはハマ

メットの旧市街とカルタゴの遺跡、そしてそのすぐ近くにある白い壁と青い扉が美しい海辺の村シディ・ブ・サイドのみだったが、かぎりなく青い海を見下ろしながら、けっして大きくはないこの国（面積は日本の2/5、人口は1200万人弱）が、紀元前9世紀にフェニキア人がつくった都市国家に始まり、ローマ帝国、ビザンチン、アラブ人、オスマン帝国、フランスなどの影響のもとに歴史を刻んできたことを思うと感慨深いものがあった。戦後は、フランスからの独立を勝ち取ったあと王政が廃止されて共和国が誕生し、政教分離が行われた。近年、ケベックでも、日本でも、ヴェールを被った女性を目にすることが増えたが、チュニジアでは意外にも若い女性たちのヴェール姿は多くなかった。現在チュニジアはEU・地中海自由貿易圏構想に積極的に参加しているようだが、そのことは帰路、空港で出国手続きを済ませるや否や、免税店での値段表示がユーロに変わったことからもうかがえる。

アルジェリア、モロッコ、チュニジアのフランス語教育関係者をパネリストに迎えた討論会では、これまでアラビア語を公用語とし、フランス語を第1外国語としてきたマグレブ諸国でも、近年、小学校低学年から英語教育を導入する動きが強まっていることが報告された。フランス語に代えて英語を学ぶのか、フランス語に加えて英語を学ぶのかでは大きな違いがある。また、英語教育を導入するのであれば、高等教育や社会での受け皿の準備が必須であるとの指摘もあった。グローバル化が英語化とほとんど同義である現代社会において、言語とアイデンティティの問題が切り離せないのはマグレブ諸国も同様である。

来年の大会はカナダ・ニューブランズウィック州のモンクトンで「*Déclinaisons de l'altérité*」を主要テーマとして開催されることが決定している。

(小倉和子 立教大学)